

# フィンランド二言語地域における高齢者福祉とコミュニティケア

高橋 絵里香

(東京大学大学院 総合文化研究科  
超域文化科学専攻 博士後期課程)

## <要 旨>

多言語社会においては、スタッフと高齢者間のコミュニケーションという問題以上に、地域社会を形作る要素として、言語は福祉制度と深い関係にある。その関係に注目する為に、フィンランドの二言語併用地域におけるコミュニティケアに注目して、現地調査を行ってきた。

具体的には2002年6月～2003年12月の期間、フィンランド西南部の町 Pargas/Parainen において人類学的なフィールドワークを行った。特に、町の老人ホーム・ケア付住宅・デイサービスセンターといった町行政の提供する高齢者向けのサービスを全般的に参与観察すると共に、それ以外の第三セクターがアクターとして関わる活動にも参加し、福祉サービスの側面からだけでは不十分な高齢者の生活の全体像を把握するべく注目していった。

調査の結果、二つの言語集団はそれぞれが保持する社会資本の量、あるいは社会的なネットワークへのアクセス機会が異なっていることが分かった。フィンランド語系はスウェーデン語系に比べて、自発的に福祉サービスへ参加するきっかけが少なく、サービス内容もスウェーデン語系の慣習に沿ったものに偏りがちである。

このように、現在の福祉政策の中で推し進められているコミュニティケアの概念であるが、共同体そのものが多様であり、その特徴がケアの現場に影響を与える以上、共同体の特質をそのまま反映してしまう危険性があるのではないかと懸念される。

## <キーワード>

フィンランド、高齢者福祉、コミュニティケア、言語的マイノリティ

### 【はじめに】

コミュニティケアについて考える場合、その土台となる共同体の性質が特徴的であることは、分かりやすい指標となる。その社会的特徴が、福祉制度の形成にどのような影響を与えているのか、見ていくことが出来るからである。

その良い例が、多言語社会における福祉であろう。スタッフと高齢者間のコミュニケーションに使用されるという以上に、言語は地域社会を形作る要素として、福祉制度と深い関係にある。

こうした関心に基づき、フィンランドのバイリンガル地域におけるコミュニティケアに注目して、現地調査を行ってきた。具体的には2002年6月～2003年12月の期間、フィンランド西南部の町 Pargas/Parainen において人類学的なフィールドワークを行った。

調査の手法は参与観察と呼ばれるもので、これは調査者自身が現地の人々の活動に直接

参加し、ラポール（調査を行う上での信頼関係）を築きながら観察を行っていくというものである。今回の調査では、町の老人ホーム・ケア付住宅・デイサービスセンター等を定期的に訪問し、スタッフの仕事を手伝いながら、高齢者・スタッフの双方に対して定期的に話を伺った。

特に、2002年9月にオープンしたデイサービスセンター Seniorstugan/Senioritupa については、その開設前からボランティアとして参加し、センターが町の高齢者福祉の一つの拠点として発展していく様子を観察してきた。

また、町行政の福祉サービスの他に、教会が行う高齢者の自宅訪問やサマーキャンプ、赤十字のボランティアと言った第三セクターの活動にも参加し、福祉サービスの側面からだけでは不十分な高齢者の生活の全体像を把握するべく注目していった。

こうした調査から、Pargas/Parainen における高齢者福祉の総体を共同体の視点から把握

することに努めた。

以下は、この1年7ヶ月間のフィールドワークに基づく報告である。

### 【フィンランドと言葉】

フィンランドでは、1919年に制定された憲法（2000年に改定）により、フィンランド語とスウェーデン語が「国語」(fi. kansalliskieli, sw. nationalspråk)として定められている。このスウェーデン語の地位は、フィンランドの歴史と深いかかわりを持っている。

1809年まで、フィンランドはスウェーデン王国の一部であった。フィンランド語は公用語としては認められず、家庭の中だけで話される民衆の言葉であった。

しかしこの年、フィンランドはスウェーデンからロシアに割譲された。その後、ロシアの政策によって、フィンランド語はスウェーデン語と対等の立場に置かれるようになる。そして1917年、ロシアから独立後に制定された憲法によって、フィンランド語とスウェーデン語が国語として確定したのである。

ここで重要な問題となるのは、18世紀の民族ロマン主義においては、フィンランドのスウェーデン語話者である知識人・支配層の間から、フィンランド語・フィンランド文化を見直す機運が生まれた点である。民族ロマン主義運動はナショナリズムの意識を高め、フィンランドの国家としての独立に繋がる大きな寄与を行った。

例えば、フィンランドの国民的哲学者スネルマン(J. V. Snellman)は、民族の言葉は民族の精神を最も深く表現するものであると主張した。こうした理由から、ロマン主義の時代(18世紀)には、民族精神が個人的また集団的国民意識に結びついていくような、「カレワラ」に代表されるフィンランド語の国民文学が誕生した。

つまり、フィンランドにおける国民国家の成立にとって、言語は国家存在の重要な象徴としての役割を果たした。そして、

「我々は、もはやスウェーデン人ではない。けれどもロシア人ではありえない。だから、フィンランド人でいこう」

という言葉に代表される通り、スウェーデン語を母語として話すマイノリティであるスウェーデン語系フィンランド人は、言語と国民意識に関して、高い意識を一貫して持ち続けてきたのである。

### 【スウェーデン語系フィンランド人】

(fi. suomenruotsalainen, sw. finlandsvenska)

現在、人口の約5.7%に当たる約30万人がスウェーデン語系として登録されている。かつての統治国の国家語であった時代に由来するように、今日でもビジネス・政治・文化の世界で影響力を持つ人々の多くがスウェーデン語系の出身である。このことがスウェーデン語の地位を支えてきた。

こうした経緯から、スウェーデン語を母語とするフィンランドの少数言語集団は、「世界中でもっとも恵まれたマイノリティ」と呼ばれている。また、フィンランド国内におけるスウェーデン語系の権利もはっきりと保証されているのである。

フィンランドにおいて、フィンランド語とスウェーデン語は、言語の使用される場所と状況に基づき、共に多数派・少数派言語として機能することが出来る。自治体は、その人口の8%か、あるいは三千人以上が他言語を使用した時点でバイリンガルとなる。バイリンガルの自治体においては、両言語において行政のサービスを受けることを可能にすることが義務として定められている。

また、小学校から大学に至るまで、スウェーデン語による教育機会は豊富にあり、それは神学校や徴兵制度にまで及ぶ。劇場・ラジオ・雑誌・テレビ・新聞などにおいても、スウェーデン語のメディアを選択することが可能である。

さらに、フィンランドは1995年にEUへ加盟し、欧州地域語・少数言語憲章(the European Charter for Regional or Minority Languages)を批准した。これは、多数言語の中における少数言語および地域言語の地位を高め、保護することを目的とする。フィンランドはスウェーデン語について最大限の保護を付与すると選択した。

この憲章には、フィンランド人はスウェーデン語系フィンランド人とサーミ人に対して、「ヘルスケアと社会福祉のサービスを望む者に供給することを保証しなくてはならない」と明記されている。では、こうした二言語状況は、福祉の実態にどのような影響を与えているのだろうか？

### 【フィンランドの社会保障と高齢者福祉】

人口520万人のフィンランドにおいて、2003年度の高齢化率(65歳以上の割合)は15.6%だった。これは、他の北欧諸国に比べれば低い割

合であるものの、先進国の中で高齢化という問題を抱えていることに変わりはない。

また、フィンランドの高齢者人口の増加は、第二次大戦後の生活・医療水準の向上による平均余命の伸張と核家族・小規模家族の標準化による少子化が相俟って、他の北欧諸国と比べても早いペースで進んだ。現在のフィンランドにおける平均余命は、女性が81.8歳、男性が75.1歳となっている。

こうした状況において、フィンランドの福祉国家としての発展は、他国よりも遅い1950年代から始まった。

フィンランド福祉国家は、単に経済面での所得保障にとどまらない豊富な福祉サービスの供給によって、市民生活に深く浸透している。所得分配による社会保障政策、労働政策および社会福祉の諸政策に加え、住宅、教育、消費者保護および環境といった諸分野をもその領域に含むきめ細かなサービスは、市民生活全般に深く関わっているのである。

フィンランド福祉国家は、コーポラティズムの様相が強い点において、他の三カ国から区別されている。しかし、社会保障と制度の充実から見れば、フィンランドは「サービス国家」としての北欧型福祉国家の一員であると言えよう。

現在では、フィンランドでは地方分権がすすみ、452の自治体は、住民への課税権を持ち、教育、保健医療、福祉、地域計画を担っている。つまり、ローカルなケアサービスの責任は市町村が受け持っており、その詳細はフィンランド国内でも多様である。

そうした地方分権のケーススタディとして、またコミュニティケアの実践例として、一つの自治体の取り組みを紹介する。

### 【Pargas/Parainen】

スウェーデン語でPargas、フィンランド語でPargasと呼ばれる町は、古くからスウェーデン語系住民の居住してきたフィンランド南西沿岸部に位置する。

この辺りでは、十二世紀から、スウェーデン本土より移民が進んだ。特にÅbo/Turku（スウェーデン語/フィンランド語）市は、スウェーデンが宗主国であった時代の首都である。（1827年の大火がきっかけでHelsinkiに遷都された）

Pargas/Parainenは、このÅbo/Turkuから車で30分ほど行ったところにある自治体である。人口は約12,000人。そのうち、54%がスウェーデン語話者で、残りの46%がフィンランド語話者である。町の広さは480平方キロで、

海に囲まれたフィンランドで唯一の自治体として、群島部の中心地となっている。

主な産業は石灰鉱山である。特に、Partekという石灰採掘を行う企業が、町の成り立ちに重要な役割を果たした。Partekは、伝統的にスウェーデン語系資本であったが、労働者は東からやってきたフィンランド語系である。この人口が流入することで、20世紀の初頭から、Pargas/Parainenのフィンランド語人口は増加する傾向にあったのである。

以上のような状況を踏まえ、Pargas/Parainenの高齢者福祉の様相を捉えていきたい。

### 【Pargas/Parainenのヘルスケアサービス】

町が発行しているパンフレットによれば、Pargas/Parainenに住む高齢者が受けることの出来る福祉サービスは以下の通りである。

1. ホームサービス（ホームヘルプと家事援助）
2. サポートサービス  
    配食・サウナ・洋服サービス
3. ハンディキャップの人々の為のドライブサービス
4. ドライブサービス
5. セキュリティサービス
6. 家族介護者のサポート
7. 高齢者の住居改築
8. 障害を持つ復員兵に対する社会給付金
9. ケア付き住宅  
    (Björkebo/Koivukoto 白樺の郷)
10. 痴呆者向けデイケアセンター  
    (Solgläntan/Aurinkoinen)
11. Malmkulla 老人ホーム  
    短期入所/長期入所
12. デイサービスセンター  
    (Seniorstugan/Senioritupa)

この中で、報告者が特に注目をしたのは、9番と11番の活動である。

### 【Seniorstugan/Senioritupa（老人の家）】

Seniorstugan/Senioritupaは、2002年9月に発足したデイサービスセンターである。痴呆症向けのデイケアセンターを除けば、フィンランドではこのような施設は2例目となる。

報告者はこの施設の開設前からボランティアとして参加し、その発展を見守った。昨日としては日本のデイサービスや宅老所に近いが、独自の部分も多い。

その特徴を列挙すれば、以下の通りである。

1. 町の職員は一人だけで、残りのスタッフは全員がボランティアである。(赤十字出身が多い)
2. 高齢者達は好きな時間に来て、好きな時間に帰っていく。(但し、デイケア部門は時間と料金が決まっている。一日に3～4人が昼間の時間を過ごす)
3. Seniorstugan/Senioritupa では、週に何回か催しものが開かれる。これらのプログラム内容は、基本的には職員のアイデア。ただし、開催に当たっては、町の多くの組織が協力している。

この3番目の特徴の中に、二言語状況は特に顕著な影響を与えている。そこで、一つの事例として、De Äldres Vecka/Ikähmisten Viikko (老人週間)のプログラム内容を取り上げることで、問題を検討する材料としたい。

#### 【Seniorstugan/Senioritupa の老人週間】

2003. 10. 06. (Mon)

フィンランド赤十字”Ljugarbänken”について講演(「嘘つきのベンチ」という名称の男性高齢者専門の団体。Åbo/Turkuで活動している) (sv/fi)  
 “Pargas/Parainen の昔”  
 (歴史研究会の発表) (sv)

2003. 10. 07. (Tue)

” 絵画の話” (sv/fi)

2003. 10. 08. (Wed)

糖尿病について講演。血糖値の測定 (sv/fi)

2003. 10. 09. (Thu)

” Runosmäen Ruususet” (ルノスマキの薔薇) 公演 (fi)

2003. 10. 10. (Fri)

当てっこゲーム (sv/fi)

これらのイベントでは、両言語と記載されていても (sv/fi)、実際にはスウェーデン語しか話されないことも多い。発表者がフィンランド語を話すことが「可能」であるということと、実際に一つの公演を二言語で行うことは別問題なのである。

また、フィンランド語話者が集まるのは、明らかに彼ら向けと分かるイベントである。例えばフィンランド語での礼拝・フィンランド語話者の公演・主催者がフィンランド語話者であるなどの場合はフィンランド語話者が集まる。

しかし、そうでない場合は幾ら二言語と記載されていても、実際に集まるのはスウェーデン語系フィンランド人である。例えば血糖値測定のような場面では、言葉の違いによる意思疎通の困難はないが、スウェーデン語系の人々が集まって話していれば、フィンランド語話者は居心地の悪さを感じることも多い。

つまり、これらのプログラムにおいては、言語それ自体のアベイラビリティが問題になるわけではなく、言語集団それぞれが持つ社会的な行動範囲の違いが問題となるのである。

#### 【サービスハウス

##### (Servicehuset/Palvelutalo)】

次に、ケア付住宅の例を取り上げたい。

Björkebo/Koivukoto (白樺の郷) は、ケア付き住宅の集まるエリアである。62棟のフラットはそれぞれ個室となっていて、エリア内をホームヘルパー達が巡回することで、独居よりも充実したケアを受けることが出来る。

敷地内には、ホームサービスのオフィス、痴呆者のデイケア、精神障害者のグループホームとして使われている建物と、クラブ活動・食堂・配食サービスに使われているサービスハウス (Servicehuset/Palvelutalo) がある。

サービスハウスには、食堂の他に Björkebo の老人の為のクラブがあり、町の高齢者委員会等の会合にも貸し出される。更に、大きなイベントの開催場所として、外部からも人が集まることで、地域の活動拠点となっている。

イベントとしては、季節の年中行事が顕著なものとして挙げられる。例えば、ルシア祭・クリスマス・夏至祭、そして上述の老人週間などである。

ここで、年中行事の一例として夏至祭を取り上げる。

#### 【夏至祭】

フィンランドにおける夏至は、6月22日を過ぎた翌週末と定められているが、実際にサービスハウスで祭が催されるのは、スタッフが勤務している夏至前の平日である。

夏至祭の詳細は、以下の通りである。

#### 祭の手順

1. 夏至の柱 (Midssomarstång) 作り  
 \*フィンランド東部では、柱を作らない代わりに、水辺でかがり火を燃やす。夏至の柱は、元々Åland諸島やスウェーデン

- で盛んな行事。
2. 柱を立てる
  3. 挨拶・音楽
  4. 夏至の食事  
(新じゃが芋・ニン)

#### 夏至の柱が立てられる場所

1. Servicehuset (サービスハウス)
2. Sattmalk (観光村)
3. Malmkulla (老人ホーム)



〈サービスハウス前での“夏至の柱”作成風景〉

#### サービスハウスにおける夏至祭の特徴

1. 規模が大きいので(夏至の柱)、人員と場所を必要とする為、老人ホーム・サービスハウスといった福祉施設で行われる
2. 行事自体は外部の人間に対しても開かれており、近隣の人も見に来る。
3. 夏至の柱を作るという習慣は、もともとスウェーデン語系のものである。実際の運営をするスタッフは、言語集団的には混合状態である。しかし、全体としての行事のトーンは、スウェーデン語系に偏ったものである。

このようなスウェーデン語系に対する傾斜は、行政の供給するサービスに限ったことではない。

#### 【Församling/Seurakunta (教区)】

フィンランドは福音ルーテル派を信仰する人々が8割を超える、プロテスタントの国家である。それぞれの地区は教会の教区として分けられ、地域福祉に重要な役割を果たしている。

Pargas/Parainen には、スウェーデン語教区

とフィンランド語教区が並存している。(フィンランド語教区は、フィンランド語話者の人口が増えた約三十年前に新しく創設された)

牧師・教会執事等の役職は全て、教区ごとに別れている。予算のプールと敷地だけが共同である。(予算も人口に基づいて配分されるが、最終的にはフィンランド語教区への貸与が行われている) こうした二つの教区を行う仕事のうちで、高齢者福祉に重要な役割を果たすのが、教会執事である。

教会執事(Diakonissor/Diakoni)は、スウェーデン語教区に2人、フィンランド語教区に1人いる役職である。彼らの仕事は、家庭訪問・老人会の運営・他の組織との交流・看護婦などである。もともと、教会執事の資格は看護婦が取る事が出来るものだった。それは、看護の仕事が教会が行っていた過去の歴史によるものだが、現在でも血圧を測る等のサービスを行っている。

また、教会執事以外の行う仕事としては、幼稚園の運営・老人会・マザーテレサの会などが福祉とかかわりを持つものとして挙げられる。これらの教会内部でのサービスの多様性・組織数は、圧倒的にスウェーデン語教区の方が勝っている。

#### 【お年より向け夏のキャンプ】

教会の行う高齢者向けのサービスの一つに、夏のキャンプがある。これは、教会執事がプログラムを計画、引率を行っている。

参加者は、Pensionärsföreningen/Kultainenkerhoの両教区老人会である。その他に、新聞でも参加者の募集を行っている。

町内のキャンプセンターで毎年8月に、聖信礼キャンプ等のスケジュールを終えた一番

後に行われることが決まっている。

これらのキャンプは、それぞれ14歳の子供を対象とした聖信礼キャンプのフォーマットを踏襲しているが、そのやり方がそもそも二つの教区によって異なっていると思われる。それは、参考とする教科書の違い(スウェーデン語教区では、スウェーデン本土の文献を使用。こちらの方が、はるかにリベラル)とも関係している。

キャンプのプログラム内容を比べてみると、他組織との間のネットワークの広がりや違い・形式性の度合いに違いが見られる。

次頁の表を元に、その違いについて挙げた。

フィンランド語教区		スウェーデン語教区	
日付	プログラム内容	日付	プログラム内容
8月13日	昼に参加者が到着。 それぞれの部屋の整理。 2時からお茶。 3時からルール説明ネームカード作成。 4時45分から夕食。 6時半から謎々（子供向けのキャンプガイドから引用）	8月21日	10時半に到着。 昼ごはん。 2時まで休憩。お茶。 サリで歌とキャンプの説明とゲーム。 「マディッケン」の朗読。暇つぶしの道具の紹介（パズル、毛糸を巻きなおす、マザーテレサ用の毛布、一つの単語の文字を組み合わせて他の単語を作る） 夕方のゲスト：アコーディオン奏者。
8月14日	昼間は教会執事とゲーム。 夕方から教会付き奏者とその子供がミニコンサート	8月22日	8時から9時の間に朝食（時間は決まっていない）。 午前中のゲスト。11月に就任した新任牧師。 午後はお茶・「マディッケン」・ゲーム。 夜のゲスト：聖信礼用学校で働く若い男の子二人のコント
8月15日	午前中体操、歌付きの体操、クイズ。 Vanhakouppooの見学。 2時頃から一日キャンプ体験者が訪問。ネイチャリングを行う。 夜はディスカッション。「記憶について」	8月23日	オーボランド・スウェーデン語教区の日帰り旅行（アーキペラゴの島を巡る）。 残った人々は、教会執事の娘（老人ホーム経営者）と過ごす。サウナ。 夕方～夜のゲスト：教会牧師が屋外でソーセージを焼いて、出し物
8月16日	：オリンピック（簡単なゲーム）、 午後からサウナ。夜は参加者の出し物を見物	8月24日	午前中：クイズ・朗読。 午後：Gamla koupoの礼拝堂でミサ。 夜：映画「エミール」
8月17日	ミサ	8月25日	午前中のゲスト：教会の整備士が鐘楼についてのスライドを上映 昼食の後、解散

- 表に太字で示したように、キャンプでは外部からゲストを向かえてプログラムを構成する。  
しかし、スウェーデン語教区のキャンプに比べて、フィンランド語教区のキャンプの来訪者は、教会内部の関係者が多い。あるいは、8月14日のような一日体験を新聞で募集した人々である。
- キャンプのプログラム自体も、フィンランド語教区の方がより形式的である。スウェーデン語教区のキャンプは、映画鑑賞や児童書の朗読など、より娯楽に近い。これは、フィンランド語教区のキャンプにだけ登場する決まり文句を、高齢者達に一斉唱和させるところからも分かる。

“Kiitos tästä päivästä, se oli kiva”（今日という日をありがとうございました、楽しかったです→一日の最後に）

“Emännille kiitos”（まかないさん、ありがとう→食事の後に）

以上の違いから分かることは、二つの言語集団間の違いを際立たせているのは、それぞれのもつ社会的資本、あるいは社会的ネット

ワークの広がりの違いであるという点である。このことが、福祉の供給現場においても、差異を表出させている。

次の事例は、それを最も端的に表す年中行事であるロシア祭である。

#### 【ロシア祭】

12月13日の聖ロシアの主日の祝いでは、光の象徴である聖女ロシアを通して、一年で一番暗い時期に光をもたらす。元来、スウェーデンで行われていた祭である。現在でも、スウェーデン語系住民の多い西部から南部の自治体とヘルシンキで行われている。

具体的には、17歳の少女達の中から、町ごとにその年の聖ロシアが新聞の投票で選ばれる。ロシアと付き添いの子供達は、依頼を受けた団体のパーティーや福祉施設を訪問する。

訪問先での流れ：

サンタルシアの朗誦と共に入場  
詩の朗読（Viola Renvall という Pargas/Parainen の詩人が作詞）

主催団体：

Folkhälsan（主にデイケアセンター等を経営

するスウェーデン語系財団)と新聞が協力  
\*参加者・協力団体・訪問先は殆どがスウェーデン語系の組織・人々である。

#### ルシア訪問のプログラム

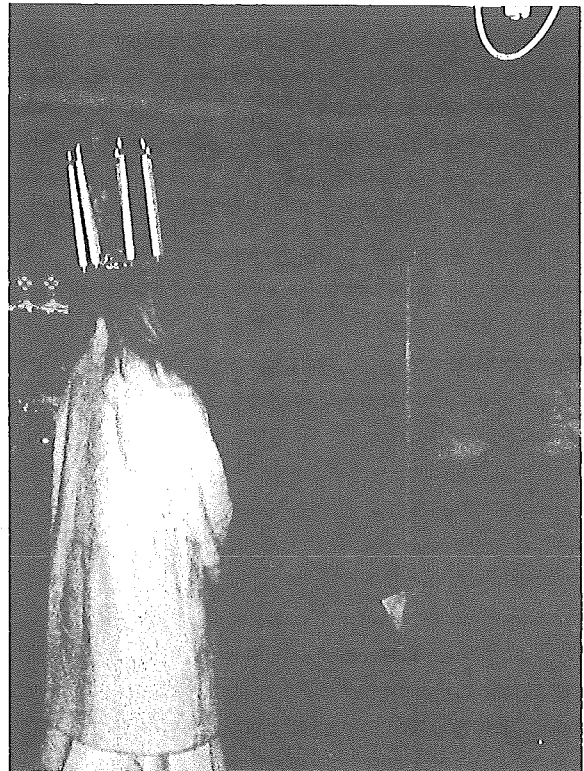
- 12. 12. デイケアセンター (子供向け)
- 12. 13. Nordea 銀行で朝のコーヒー  
教会で礼拝→パレード  
Partek のクリスマスパーティー  
Pargaskungörelsens と ÅboUnderrättes  
lers (新聞) のクリスマスパーティー
- 12. 15. マルタ会、クリスマスパーティー
- 12. 16. サービスハウス
- 12. 17. Pargas 年金生活者の会 (SV)  
パルガス港ロータリークラブ
- 12. 18. Åboland 視覚障害者の会
- 12. 19. Lucia の自宅訪問。教会牧師と Mudd  
aisdiakoni syförening が同行
- 12. 20. Pargas の市
- 12. 21. Kärkulla (精神病院)
- 12. 22. Seniorstugan (デイセンター)  
町立病院の入院病棟と、Malmkulla 老  
人ホーム
- 12. 23. Pargas 職業訓練センター

特に太字で示した部分から分かるように、ルシア祭は現在では町の福祉と関わる部分が多い。ルシアの訪問先は町の福祉施設であったり、いわゆる社会的弱者の暮らす世帯であったりする。特に、教会牧師が同行する Lucia の自宅訪問では、高齢者や障害者の家を訪ね、Lucia の詩を朗読する。

しかし、ルシア祭がスウェーデン語系の行事であることから分かるように、Lucia の訪問先は基本的にスウェーデン語話者の世帯であり、施設においてもスウェーデン語で朗読が行われるのである。

このように、地域の年中行事は、現在では主に福祉関連のアクターによって遂行されている。こうした行事を催すこと、そこにお年寄りを参加させることは、現代の文脈に置いては福祉的な意味合いを帯びているのである。

しかし、こうした方向性は、地域社会の歴史的背景・社会的な特徴をそのまま福祉の現場に反映させてしまう危険性もあるのである。



【ルシアの自宅訪問】

#### 【フィンランド語系の不満】

Pargas/Parainen の二言語状況における生活は、主にスウェーデン語系住民へのサービス偏重という形で表出している。

例えば、行政の職員の雇用条件においては、両言語を話すことが不可欠とされている。しかし、こうした建前とは別に、福祉現場において言語集団に基づく差異が全く見られないわけではない。

実際、役所の社会福祉局で管理職についている人々は、殆どが母語をスウェーデン語としている。これは、言語能力自体の問題ではなく、それぞれの言語集団が持つ社会的背景の違いが影響している為と考えられる。この傾向は、福祉の現場にも明らかな差異を生みだしている。

また、自由意志で参加を問うサービスハウスやデイセンターのイベントの場合、異なる言語集団の中に入っていくことは、その集団に友人関係や婚姻関係を持たない人々にとって敷居の高いものとなる。特に、言語集団によって文化的に異なる年中行事を題材にしたイベント、例えば上述のルシア祭や、フィンランド語系の「カレワラの日」を福祉施設で演出する時に、その違いは歴然となる。

さらに、組織間の連携という問題もある。近年はフィンランドでも、行政がその職務内容を第三セクターに委託する、あるいはボランティアの参加を求めるということを積極的

に行っている。だが、その時に行政側の多数派がスウェーデン語系である為に、どうしてもそちらの組織との連携が強まりがちなのである。

また、元々スウェーデン語系の方が第三セクターの組織数が多く、活動内容も多様である。この理由に関しては、これまでも様々な論議を呼んでいるが、統計的に明らかとなっている差異である。

その為、例えばデイサービスセンターを訪れる赤十字のグループや教会の組織は、スウェーデン語系のものに偏りがちという事態が起こるのである。

こうした状況から、フィンランド語系の間には不満が生じている。それは、

「この国はフィンランドなのに、フィンランド語が使えなくなったら、私はこの国を出て行く」

という言葉に代表されているだろう。

ただし、同じスウェーデン語系・フィンランド語系でも、本人のバックグラウンドによって福祉サービスの受け入れ状況は異なってくる。例えば配偶者の母語や本人のライフヒストリーにおけるスウェーデン語とのかかわり、言語能力、現在の交際範囲などが、彼らの現状認識に影響しているのである。

### 【結論】

このように、現在の福祉政策の中で推し進められているコミュニティケアの概念であるが、共同体そのものが多様であり、その特徴がケアの現場に影響を与える以上、共同体の特質をそのまま反映してしまう危険性がある。また、ボランティアグループ、家族や親族と言った地域のネットワークが人々の介護にあたるということは、そのネットワークの偏りによる差異をそのまま保存するというところでもある。

フィンランドの場合、スウェーデン語系・フィンランド語系の二言語使用状況が、共同体を形作る一つの要素となっている。だが、こうしたマイノリティの問題は、地域の国際化が進む今日では、日本においても出現しうる状況であろう。

あるいは、民族集団の多様性以外にもコミュニティの特徴は常に反映される問題である。家族のあり方、介護に対する意識、地域の第三セクターの活発性といった事柄は、たとえ同じ国内であっても地域によって多様であり、国家によって定義される一つの制度を受け入れる過程は千差万別である。

その過程を、現地調査を通して明らかにしていくことは、福祉社会の形成という課題に対して事例を示すと同時に、従来の福祉研究において自明として受け止められてきた「文化」あるいは「コミュニティ」という概念について、再考を促すことになるのである。

現代において、福祉（＝人々の幸福の最低水準を満たす）は身体的な必要性を満たすことだけを目的としない。人間は「社会的存在」であるという前提によって、「福祉社会」あるいは「コミュニティケア」という概念が誕生した。

しかし、二言語地域の福祉の現場を見れば分かるように、コミュニティは決して等質なものではなく、人々にとって必ずしも最適なケアを提供する主体であるとは限らない。

一方、言語の視点から福祉制度を見ると、二つの言語集団の平等性を実現することが、現代における目標となっている。現代フィンランドの言語政策においては、言語的少数派の「社会的・文化的必要を満たす」ということが掲げられている。しかし、言語集団の「社会的・文化的必要」とは何だろうか？ 元来の集団の社会的差異を温存することも保護の対象となっている以上、完全な平等性の実現は難しいのではないか。

前述のケーススタディから分かるように、社会福祉の現場において、言語的権利の擁護は、コミュニティケアにおける老人の「社会参加の必要性」という概念と同じ場所に問題を抱えている。だとすれば、福祉研究と社会言語学は同じ問題意識を前提として学際的な研究を進めていく可能性があるのではないか。